説教20210117　ヨハネ2：1-11　244　21-286　222

「あなたの神はあなたを喜びとされる」

キリストよお越しください、弟子たちの中に立ち復活のみ姿を顕されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

　今日の聖書箇所は婚礼の祝宴の場面で、間違いなく祝福された喜びの時であります。アウグスティヌスは、この箇所を語るとき、「今日は多くの人々が説教を聞くためよりもむしろ、今日の日の祝いの為に集まってこられたことと思います」と言い添えました。つまりアウグスティヌスは聴衆の様子を見て、そこにあたかも人々が実際にその祝宴に列席しているかのような喜びの姿を見出したのです。（今日も、、）

　今の世の結婚の祝宴は、地味婚とか言いまして、静かに内輪で行われることもあるようですが、今日のこのカナの祝宴はそれとは正反対です。葡萄酒が限りなくふるまわれ、主イエスの弟子たちも、招かれざる客としてそこに連なっていたのです。つまりこの祝宴は内向きなものではなく、外へ外へとその祝福が広がっていくようなものです。そしてその拡がっていく祝福がアウグスティヌスの教会にも、そして今のこの教会にも波及してくるのがその祝福なのです。そこでは、その祝宴に連なる誰もが分け隔てなく、一つの喜びに満たされることが出来るのです。

　このような限りない喜びの祝宴のイメージを今の世の私たちは段々と思い描けなくなってきているのではないでしょうか。それは今申し上げました、誰もが一つの喜びを味わえる祝宴というものが、開催されなくなってきたというのがその要因でありましょう。段々とこの世から祝福が減少しているような気がいたします。

　私たちは今、祝福ということを問い直してみる必要があるでしょう。私たちはいつも主日礼拝の最後に「主があなたを祝福し、あなたを守られますように」と祝祷を受けますが、この祝福され、守られる、というのが本来の姿です。これは今の世での常識とはかなり反することだと思います。例えばこの新型コロナ渦中にあって、世の人に「神があなたを祝福し守られますように」と言えば、信仰がない人ならば、なぜ祝福されることが守られることなの、と言って疑問におもわれることでしょう。又信仰者であっても、祝福されることと守られることをすんなりとはむすびつけられないこともあるでしょう。

　なぜそうなのかを考えてみますに、その一因として、今の世では祝福は自らが追い求めるものであり、自分を守るのはその自分であるという常識が根付いているからだと思います。実はそのような人間の姿は聖書にも描かれていまして、しかも大変有名な聖書箇所がございます。旧約聖書43ページには「祝福をだましとるヤコブ」という小見出しがつけられていまして、ヤコブとエサウが父イサクからの祝福を奪い合う様が描かれています。この兄弟はこの後、長い兄弟間の争いに入りますが、聖書は、このヤコブやエサウのように祝福を追い求めて、祝福を取りに行くという行いが、必ず悲惨な争いを招くという事を語っているのです。

　でも私たちは、この世の歩みにおいて往々にして祝福を取りに行ってしまうものです。この傾向を誰しも逃れることが出来ません。バラ色の将来を思い描いて、いろいろやってみる、という事は必ずしも悪いことではありませんが、私たちはほっといてもそういうことをなす傾向にありますので、ことさら常に、神から祝福される、祝福を受けるという神からのまなざしを忘れてはならないのです。

さて、カナの婚礼に招かれそこに連なった、イエス様は、祝福を受け、その喜びを人々と共にいたしました。 この聖書箇所にはその祝宴の具体的な様子は描かれていませんが、イエス様も葡萄酒を飲んで葡萄酒に酔われ、その連日踊り明かされる祝宴の席を楽しまれたことでありましょう。それは私たちと同じまことの人としてのイエス様の姿であります。その一方で、まことの神としてのイエス様のこともここには記されています。先々週、ナザレでの家庭生活を過ごされたイエス様の聖書箇所でも真の神、真の人としてのイエス様の姿を語りましたが、その時は真の人としての姿が前面に在りました。しかし、今日の婚礼の場面では真の神としての主イエスの姿が前面に来ているように思います。4節で主イエスは 「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません」と母マリアに対して言いました。この言い方が、尊大なのか謙遜なのか、冷たいのか暖かいのは、聞く人によりそれぞれですが、真の神主イエスからすれば、このように言うのは当たり前のことでした。この主イエスの発言は、先々週の、「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」という発言を想起させられますが、十字架に向かわれる主イエスは、今や神の子としてその父なる神の御心に従って歩んでおられるのです。その真の神としてのイエス様の役割は、このカナでの祝宴を祝福することでありました。

　ではイエス様はどのように人々を祝福されたのかを見てまいりましょう。今日の祝宴の箇所には、母マリア、召使いたち、宴会の世話役、花婿、そして、弟子たちが出てまいります。ここに花嫁が出てこないのはなぜでしょう。それはこの祝宴の箇所が、イエス様が言われる「わたしの時」即ち新しいエルサレムで神と人とが共にいて永遠の祝福を受けるときの、さきがけの時として描かれているからです。新しいエルサレムでは、花婿はキリストであり、花嫁は教会すなわち私たちであります。花婿キリストとともに花嫁である全ての人がつながっている成就の時であります。確かにそのようなときはまだ来ていませんが、この世の祝宴においても、その芽生えのようなさきがけは確かにあることでしょう。「わたしの時」の祝宴においては、私たちは全て花嫁でありますので、このカナの婚礼でも花嫁という言葉は語らずに、花嫁に当たる全ての人は、先ほど挙げました母マリア、召使い、宴会の世話役、花婿、そして、弟子たちによって言い表されているのです。これらの人によって、全ての人に対する祝福がいいあらわされていきます。

　先ず、母マリアには真の神としてのイエス様を信じる信仰が与えられておりました。マリアは折に触れてイエス様の出来事を心に納めて思い起こしておりました。ですから、ここでもこのようにすぐにイエス様にお願いすることが出来たのです。「葡萄酒がなくなりました 」というマリアに対して、イエス様は「では私が葡萄酒を用意しましょう」と言われませんが、それでも、そのマリアの願いはかなえられるのです。

　次にマリアは「この人が何か言いつけたら、そのとおりにして下さい」と召使いたちに言いますが、このことは神の言葉を人々に伝達する役回りを果たしたと言えるでしょう。このようにマリアはなんだかよくわからないままに、イエス様に動かされ、全員が神の祝福にあずかるための働きに関わったのです。

　さてマリアからそのように言われました召使いたちは、その通りイエス様の言葉に従って、6っつの大きな水がめを水で満たし、それを宴会の世話役のところへと運んで行ったのです。この召使いたちの働きも全員が神の祝福にあずかるために不可欠のことでした。私たちは神に仕える者であり召し使いであり奴隷で在りますが、ここに顕れている主人に対する従順さというのは不可欠なことです。「言われたとおりに、忠実に行う」ということは私たちが主なる神を自分の主人とするとき、私たちを守り導くこととなるでしょう。

　次に、宴会の世話役を見てみましょう。世話役は味見をして一見してこれが良い葡萄酒であることに心を打たれたのです。この世話役の心に受けた喜びもまた、全員が神の祝福にあずかるために不可欠のことだったでしょう。世話役はこの葡萄酒がどこから来たのか知らなかった、しかし召使いたちは知っていたとわざわざ書き記されておりますが、これはひょっとすると世話役の心が、ここに良い葡萄酒があることの原因追及に向かわないとも限らなかったことを示唆しているかのようです。しかし、この世話役はそのような原因追及には向かわず、むしろ、花婿に向かって「あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました」と言って、驚きつつ、彼を限りなくほめたたえたのです。

　そして最後に弟子たちですが、彼らはこの祝宴のいわば招かれざる客でしたので、水がイエス様によって葡萄酒に変えられ全員にふるまわれた、ことの次第を全体的に俯瞰して見通せたので、それで、主イエスが神の栄光をあらわされたその最初のしるしを見て、主イエスを信じることが出来たのでした。

　いかがでしょうか、母マリア、召使い、宴会の世話役、花婿、そして、弟子たち、これらの人たちはイエス様に対してそれぞれ立場や関係性が異なっておりますので、それぞれにふさわしい役回りをイエス様から与えられたのではないでしょうか。そしてこれらの人たちはこの葡萄酒を口にして味わった時、単なる物理的な味わいに、はるかに勝る満たしを得ていたのではないでしょうか。

母マリアはますます主イエスに対する信仰を深め、信仰の喜びに満たされたことでしょう。召使いたちは 、自分たちの忠実さが、その通り実となって結実したことの清清しさを味わったことでありましょう。そして宴会の世話役は花婿、これは主イエスご自身でもありますが、、その花婿を限りなくほめたたえるというこの上ない喜びに満たされたことでしょう。そして弟子たちは、イエスを信じてこの先イエスと共に歩む希望に満たされたことでしょう。

　このように各人各様の喜びを、一人一人に注目してみていけば、それぞれが担った役割は、断片的で、それだけを見れば、自分がやっていることはわからない、或いは知らない間に全体の祝福へと導かれていたと言えるでしょう。そこには神の御業の驚きや不可思議さ、計り知れない喜びがあり、私たちはそのように受け止めるのです。

　さて、私たちの日常の生活に目を向けてみましょう。私たちの日々の平凡でもある暮らしにおいてもこのことは当てはまるのではないでしょうか。そこでも「 それぞれが担った役割は、断片的で、それだけを見れば、自分がやっていることはわからない、或いは知らない 」のではないでしょうか。しかし、私たちが知らないからこそ、そこにも神の御業の驚きや不可思議さが実はあるのです。

　私たちの待ち望むのは、新しいエルサレムであり永遠の祝宴の場に入れられることであります。そこに向かって私たちの歩みは続けられますが、その道行きのある一日を取り出してみれば、それは「それぞれが担った役割は、断片的で、それだけを見れば、自分がやっていることはわからない、或いは知らない」というような悶々とした時かもしれません。しかし、全てを見通すイエス様の目にはあなたは、よく知られ、あなたを常に祝福されてその行く道を守って下さいます。あなたの神、主イエス・キリストは、あなたを喜びとされています。どうか今日もその祝福があなたに与えられますように。

お祈りいたします

天の父なる神

私たちは絶えずあなたに祝福され、守られて、歩まされていますことに感謝します。日々の規則的な暮らしの中で、ややもするとそのことを忘れ、かえって祝福を追い求めてしまう私たちの罪をお許しください。私たちをあなたの祝福の業に関わらせ、あなたを高らかに感謝賛美することが出来ますように。

阪神淡路大震災から２６年が経ちました。私たちはそれから今迄に多くの災害を体験してまいりました。その一つ一つを今思い返し、今深い悲しみの内にある方々にあなたの慰めと癒しがありますようお祈りします。そしてその悲しみをやがて喜びへと変えて下さいますあなたのご配慮に感謝し、その御業を待ち望んでいます。

カナの婚礼であなたの時のしるしが示されましたように、私たちは絶えず目覚めていて、あなたの永遠の時の声を受け取ることが出来ますように。

私たちがあなたの時を見据えて、様々な誘惑や恐れに惑わされることなく、あなたの祝福の内に守られ、日々歩んでいくことが出来ますように。

父と聖霊と共に一体であって代々に生き支配されておられます、